

金基淑 [編著] 『カーストから現代インドを知るための30章』 (東京: 明石書店、2012年、317頁、
本体2,000円+税、ISBN978-4-7503-3658-9)

(評) 鈴木 真弥*

インドとカーストのイメージが密接に連携していたものが、近年ではIT産業を典型とする急速な経済成長を背景に、インドのイメージも大いに変化しつつある。しかし、カーストはインドに重くのしかかる「厄介な」問題のままであることも否めない。本書は、しばしば抽象的議論になりがちなカーストを、現地調査に長年たずさわってきた執筆者たちの実体験から描き出す試みである。カースト理解を通じて、現代インド社会への理解を深めること、そのために役立つ情報を提供することが本書の目的である。

30の章からなる本書は、テーマ別に7部で構成される。各章は、文化人類学を専門とする日本人研究者が執筆している。若手からベテランまで起用されたことで、フィールドに赴いた時期の違いが記述に反映されているものもあり興味深い。1970年代後半から現在までの長期的変化を追うもの、2000年代の動きを中心に論じるものなどさまざまである。以下、評者なりの整理とコメントを加えつつ紹介していこう。

第1部では「カーストを理解するための基本知識」(1~4章)が提示される。カーストは基本的に職種によって区分された人口集団である。分業による相互関係に依存し、ヒンドゥー教の原理に従って序列化された身分制度である。ただし、そのありさまは均質ではなく、ヒンドゥー教徒以外の宗教集団にも類似のものが存在する(第7部を参照)。

現代インドにおけるカーストは、「分業体制と序列によって支えられていた従来の有機的な諸関係はほぼ崩れてしまっている」(23頁)一方で、「結婚や政治的行動などにみられるように、カーストの横の連帯は機能しており、また現代的諸課題に直面していくなかで、逆にカースト意識が強化される場合もあるという現実を見逃してはならない」(同上)。カーストの差別性に関わる不可触民制とカースト間の不平等の除去をめざすインド政府の立場と取り組みをまとめたのが2章である。優遇政策や留保措置の受益層の認定にカーストを分類基準とした結果、カーストが永続化し、国民の分断、対立が強まる状況も生じている。行政による集団のカテゴリー化はカースト以外にも及ぶ。3章は「指定トライブ」の認定をめぐる政治的状況やカーストとの関係を、二人の青年の生き方から

* 中央大学兼任講師、大阪経済法科大学アジア太平洋センター客員研究員(社会学、インド地域研究)

・ 2012、「現代インドにおける不可触民解放の一考察—デリーの清掃カーストを中心に」、慶應義塾大学大学院社会学研究科博士学位論文。

・ 2010, "Indian Government Strategy against Caste Inequality: 'Liberating' Untouchables in the Context of Welfare Schemes," *Journal of Political Science and Sociology* (Global Center of Excellence Center of Governance for Civil Society, Keio University), 21, pp. 65-83.

論じる。カースト意識の顕在化は、優遇政策の対象集団以外にもみられる。ラージプートの末裔でクシャトリヤに属することを誇りにしているクマーワットの事例（4章）では、1990年代のその他の後進諸階級（OBC）向けの留保枠拡充政策に呼応して、当局との交渉や他カーストとの競争的関係のなかでカーストの境界線が引き直される状況が明らかにされる。

第2部「カーストの伝統的仕事を続ける人びと」（5～9章）は、カーストの特徴とされる生業との関連で産婆のチャマル、床屋のナーイー、絵師・絵語りのポトゥア、機織りのワンカル、織工のパドマ・サーリヤルが紹介される。市場経済とグローバル化はインド社会に急激な変化をもたらしており、いまや農村部においてもカースト固有の職業に就く者は多くないという。ここでいう変化とは、機械化によって仕事が失われるだけでなく、仕事に付随していた儀礼的な役割の減少にも及ぶ。たとえば、産婆には出産とそれにとまうケガレをはらう役割があった。母子の面倒を見る産婆は身体の管理と一種の子育て指導、そして出産で生じる不浄な状態をはらい、悪霊の危険性から守るなど、宗教的・社会的な意味でも大きな役割を担う（66-67頁）。しかし、1990年代に入ると道路が整備され、病院出産が主流になり始めた。政府の「指導」により、安全・衛生面が重視されるようになった。産婆の出番は減り、伝統的な知恵や技術が失われつつあるという。結婚や葬式など人生の大事な儀礼に不可欠な存在であるが、都市化が進むにつれて産婆や床屋などいわゆるサービス・カーストの仕事は縮小傾向にある。他方、芸能・職人カーストの事情は若干異なる。大量生産で安価な商品の流入に伝統技術で対抗する動きもみられる。南インドのパドマ・サーリヤルのように代々受け継がれてきた伝統工芸の技術に現代的デザインを加えることで、高い商品価値を生み出し、産業復興に成功しているカーストも存在する。

第3部「存在感を増す中間カースト」（10～12章）ではカーストの政治的側面、いわゆるアイデンティティ・ポリティクスにかかわる事例が紹介される。当該地域で人口規模が比較的大きく、土地所有層のヤーダブ、ジャートは、経済力と強力な組織力を背景に1980年代後半から政界で台頭してきた。自カーストを利する要求を掲げて支持を得てきたが、近年はカースト内の階層や政治的立場が多様化して勢いに陰りも見え始めている。アイデンティティ・ポリティクスの限界が示されているが、同様の動きが台頭しつつある指定カースト（SC）にも顕著であり、カースト間の競合関係によって暴力事件が近年頻発していることも付け加えておきたい。

第4部「グローバル化時代を生きる高位カースト」（13～17章）は、カースト制の最上層と位置づけられてきたブラーマンのほか、高位カーストのジュティ、ラージプート、ナーヤルがそれぞれの過去の「栄光」「権威」とともにどのように生きているのかを描いている。大まかな共通性として、伝統的職業との結びつきが次第に弱まりつつも、大土地所有と高学歴を背景に現在でも高いステータスを保持しているようである。「権威」を資源として戦略的に活用して（ラージプートの観光ビジネスのように）、グローバルな環境に適応しているカーストも存在する。

第5部「不可触民・後進カーストと呼ばれる人びと」（18～21章）は、カースト秩序の最下層の

不可触民カーストからドム、シュンリ、ワンナーン、ディーヤが取り上げられている。カースト制とは、関係主義的なものである。ブラーマンの浄性は、その対極にある最不浄の不可触民の存在によって成り立っている。不可触民はケガレや汚れを扱う仕事を担わされることで差別の対象とされてきた一方、儀礼的場面では欠かせない存在でもあった。現在では、儀礼機会の増加による経済的恩恵を受け、海外出稼ぎ、教育投資、上昇婚などを通じてステータスを上げるカーストも出始めているという。

依然として忌避感や蔑視と向き合わざるを得ない実情も、シュンリパラ（シュンリ・カーストの集落）という地名の変更をめぐる住民運動からうかがえる（19章）。シュンリは「酒造りカースト」とみなされ、飲酒、賭博、売春といったネガティブなイメージに結びつくことから、上層カーストの住民は「改革」運動として地名変更を求め、住民の合意のもとに実現させたという。カーストのもつ差別性、ステイグマの問題は根深く、名称変更によって乗り越えられるのか、シュンリ自身の運動への積極性がみられない理由は何か、評者には疑問が残る。シュンリの立場から事例をもう少し掘り下げていただけると、第5部の特徴がより明らかになったのではないかと思われる。

第6部「カースト社会を生きる女性たち」（22～24章）と第7部「ヒンドゥー社会以外の宗教集団とカースト」（25～30章）の事例は、カーストとジェンダー、ヒンドゥー教以外の宗教（イスラーム、仏教、キリスト教など）との関係性で紹介されている。一般にヒンドゥー社会では、女性の扱いがそのカーストの「名誉」や社会的地位を保つうえで重要なファクターと考えられていることから、男性にはない規制や役割が女性に課される。ただしそのヴァリエーションは地域や階層によってもさまざまであることが離婚や寡婦の再婚を例に示される。また、カースト的職業に女性たちも関わり、家族や親族の社会・経済的状况を変化させる主体となっていることも明らかにされる。カーストと宗教のかかわりからは、カーストが宗教を越えてインド地域に深く根づいていることが確認され、それゆえに改宗がカースト制からの断絶を必ずしも意味しないこと、ただし世代がくだるにつれてカースト意識に変化がみられることも示された。キリスト教徒の間で、トライブ出身者との結婚をタブー視する傾向（28章）は、インド社会における差別の複雑性を表している。

以上、各部の概要を紹介したが、本書を通読していくつかコメントを記しておきたい。まず、本書は多種多様な興味深い事例に満ちており、カーストの諸相および現在の実態を捉えるという本書の目的を果たしているように思われる。各章で完結しており、関心のあるところから読むこともできる。写真も豊富で、カラー写真からは色彩にあふれた現地の雰囲気を感じ取ることができる。また、カーストやインド社会の最近の事情を解説するコラムが充実しているのも本書の特色である。

ただし、豊富な事例によってカーストの「多様性」を理解することはできたが、これをどのように捉えるか、という本全体を貫く枠組みがみえづらい印象を受けた。たとえば、グローバル化と自由主義経済の影響にとまなう社会変動は、本書のほぼすべての事例に共通して認められる。では、類似のカーストの間で観察される状況の違いはどのように説明されるのか。不可触民には生業との

関わりを断ち切るカーストとそうでないカースト、地位上昇を果たしたカーストとそうでないカーストが存在するが、その違いは何によって生じるのか、などの疑問が浮かぶ。最後に総括する章があれば、本書が明らかにしているカーストの「多様性」をより深めることができたのではないだろうか。

第二に、どの事例においても結婚はカースト規制がもっとも強く残る最後の砦になっていることを改めて感じさせられた。カーストの社会関係については統計資料が存在せず、その実態を正確に把握することは非常に困難である。それゆえ、結婚に関する記述が多い本書は貴重である。評者がデリーで調査している SC のパールミーキ（清掃カースト）の間でも内婚の慣習が根強いことが観察されているが、その理由として、自カーストの地位の低さや共通の「文化」を指摘する回答が多く得られた。階層、地域、時には宗教の違いを越えてカースト内婚が支持される実態の解明を期待したい。

第三に、用語に関して、カーストの相対的位置づけを表す際の「高位」「上層」「中間」「後進」「低位」「最下層」の使い分けが十分に説明されているとはいえない。専門家以外の読者は混乱しないか、多少気になるところである。

カーストを日本の学生に教えることの難しさが冒頭部で述べられているが（3頁）、評者も強く同意する。その意味で、一般向けの書物が日本語で刊行されたことは学生・教員にとって非常に有用で、繰り返し参照されるだろう。また、本書に収められた 30 近い社会集団の動向は民族誌資料として、同地域の研究者に有効な視点をもたらしてくれるに違いない。